

第3回 史跡等における歴史的建造物の復元のあり方に関するワーキンググループ 議事要旨

【事例紹介の概要】

- 白河小峰城は、往時は木造の城があったということを表現してほしいと市民から要望があって再現を行った。
- 白河小峰城は、往時の歴史的建造物を復元することで、そこが城だということが顕在化してまちのシンボルとなり、
 - ・城を核とした中心市街地活性化・景観形成などまちづくりの方針を明確化する役割
 - ・震災以前よりも観光客が増加しているように、観光振興の柱としての役割を果たしている。
- 五稜郭跡の箱館奉行所は、史跡本来の姿が再現されたことで、往時の歴史を体感できる場となったほか、市民や来訪者にその外観などが親しまれている。また、文化活動の場としても活用がなされている。

【意見交換】

- 本物志向で復元を行っていくことは、その分野での研究の発展や伝統技術の継承などの営みが行われるという点でも価値があり、大変意義深いと考える。
- 史跡における建造物の復元は、単なる史跡の価値を伝えるプレゼンテーションであるというだけでなく、史跡の価値をより高めることができる建造物となる場合もあり得る。
- 史跡における建造物の復元に当たっては、きちんとその効果を理解してもらえないといけない。
- 無理に忠実という限定されてしまうため、どのような意義や効果があるのかを踏まえれば、様々なタイプの復元があってもいいかもしれない。
- 何かの価値があるから史跡指定されている訳なので、建造物の復元をしなくても工夫次第でその価値は伝えられるはずである。他方で、復元により目に見える形になり、来訪者や住民に訴える効果があることはヒアリングにより理解できた。ただし、その場合でも外観は忠実に再現し、どこを変えてどこを忠実に再現しているのかを伝えることが必要である。
- 歴史資源を活かした国土づくりを進めるべきであり、歴史資源を観光資源に使った地域振興も賛成であると考えているが、遺跡における建造物の復元を野放図に許容するのではなく、一定の制約は必要である。
- 復元に向けて様々な資料整理がなされているにも関わらず、その資料が公開されるルールづくりがなされていないので、どこまでが忠実な復元かということが明示されにくい。
- 決して往時の姿が完全に分かる訳ではないのだから、現代において、分からないところも含めてどのように考えて復元建造物を建造したのかを明示すべき。
- 外観だけ忠実に再現するというだけでなく、内部だけの再現ということもあり得るので、復元基準が現代的な課題に対応できているか検討することも必要かもしれない。
- 復元建造物をどのように修理していくのかも検討すべき。